

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(六)

植 木 久 行

●一七五番 白居易「縣の西郊の秋、馬造に寄贈す」「風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂寞紅」

○元和元年(八〇六)の秋、作者三五歳、京兆府鰲屋縣(陝西省周至縣)城の西郊での作(花房・朱)。鰲屋縣尉在任。鰲屋縣は、都長安の西南一百三十里にある畿縣の名。終南山の北麓に位置し、縣の名は「山の曲を鰲と曰ひ、水の曲を屋と曰ふ」ことに由來する(『元和郡縣圖志』卷二や、『長安志』卷十八など)。ただ『廣韻』下平聲・尤第十八、鰲の條には「水曲曰鰲、山曲曰屋」とあって、二字の解釋が全く逆である。『廣韻』のほうがむしろ古義にかなうともされるが、段玉裁『說文解字注』十篇下、鰲の條には、鰲屋を「周旋・折旋の段借」とする。要するに、縣の名は山と水の曲折にちなむ。

北宋の宋敏求『長安志』卷十八、鰲屋縣の條によれば、縣城

の大きさは「周(周圍)五里餘一百二十五步(約三キロ)、(城壁の)崇(たか)さ二丈二尺(約六・六メートル)、壕(ほり)の深さ一丈三尺(約四メートル)」である。縣城レベルの構造としては、濠(ほり)が異常に深い。これは、吐蕃の騎兵に對する防禦強化のためらしい。

白居易の就いた縣尉の職掌は、單なる警察署長、もしくは檢察官ではない。中縣以下では一人の尉が令(縣の長官)を補佐して縣政全般を總括するが、上縣以上では「戸口の按比・賦役の催驅といった民生の仕事を担当する司戸擔當の尉」と、刑獄、すなわち警察・裁判の事務に従事する司法擔當の尉に分かれ、縣政を補佐した。白居易の鰲屋尉は、前者の司戸擔當の尉である。詳しくは礪波護『唐代政治社會史研究』第Ⅱ部第一章「唐代の縣尉」参照。ちなみに、畿縣の縣

尉は二人、官品は正九品下。

○〔寄贈〕 白詩には、さらに三例あるが、いずれも詩題に見える〔索引〕。しかも、「宣武の令狐相公〔楚〕」詩を以て寄贈せられ、吳中に傳播す。…詩（卷24、後集卷7、蘇州での作。宣武軍節度使の治所は汴州〔河南省開封市〕は、明らかに寄（人に託して遠方の人に詩文や物などを贈りとどける）の意味であり、他も同例。つまり、白詩の「寄贈」は「寄」を二音節化した言葉であり、この意味で前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本などが、詩題を「縣西郊秋寄馬造」に作るのが注目される〔校異和漢朗詠集〕。要するに、作者は馬造に向かって直接、詩を贈ったのではない。

○〔馬造〕 朱『年譜』（三七頁）は「馬逢の弟か」と推測したが、同『箋校』では自説を少し改めて「馬逢の昆仲（兄弟）輩か」とする。他方、王拾遺「元稹主要交游考（下）」は、元稹の「天壇上境」詩（卷十六）の題下自注、

貞元二十年五月十四日、夜宿天壇石幢側。十五日得盤屋馬逢少府書、知予遠上天壇、因以長句見贈、篇末仍云「靈溪試爲訪金丹」、因於壇上還贈。

に着目している（少府は縣尉の別稱）、

貞元二十年（八〇四）五月、馬逢は盤屋縣尉に在任してい

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

た。元和元年（二年後の八〇六）の秋、白居易は盤屋縣尉に轉出するが、おそらくこの馬逢の後任である。馬逢がなぜ官職を失ったのか、はっきりしないが、要するに當時、非常に苦悶していた。白居易には「縣西郊秋寄贈馬造」詩がある。この縣は盤屋縣を指す。秋とは元和元年の秋であり、造は逢の誤りであるはずだ。白詩の第五句に「我は宦遊を厭ひ 君は失意す」とあり、その官途に志を得ぬ事態が生じたことを物語る。そうでなければ、「失意」という表現を用いるはずはない。

と（大意）。この王説は、朱金城の説よりも注目に値する。それは、

① 白居易が都長安で元和三年（八〇八）から元和六年に到る間に作った「馬侍御の贈らるるに答ふ」詩に見える馬侍御は、馬總（花房英樹説）ではなく、この馬逢と推測されること（朱『箋校』卷14）。

② 『文苑英華』卷二五八（宋版）には、馬造の造に對して、「集」には逢に作る」と注する。この校語は、南宋の彭叔夏や胡柯らが當時通行の『白氏文集』によって校勘した結果である（ただし、南宋初年の紹興刊本は「造」に作る）。異文の「逢」は「逢」字の形訛とも考えうること。

③ 『唐才子傳校箋』卷五、馬逢の條（吳汝煜・胡可先執筆）の考證によれば、元和四年ごろ、馬逢は「貧 堪ふべからず」（『唐國史補』卷中「求碑誌救貧」）という不遇な状況下にあったらしいこと。

の三點を考慮すれば、馬造を馬逢の形訛とする王説は、少くとも一説として成立しそうである。なお、馬逢については、岑仲勉『元和姓纂四校記』卷七（六七六頁）や、曹汛『茂陵才子馬逢』なども参照。

○〔詩型〕 本詩は七言六句の獨特の詩型をもつ。清の趙翼『甌北詩話』卷四にいう、白居易は古詩や律詩の詩型に對して、獨自の風格をもつ様式を多く創造したが、この「六句にして七律一首を成す」詩型に對しては、「青蓮（李白）の集中に已にこれ有り。香山（白居易）は最も多きも、その體は又た一ならず」として、

- (a) 中間の第二聯のみ對句である六句律の正體：「種桃杏」（卷18）
- (b) 前の二聯が對句：「感櫻桃花、因招飲客」（卷18）
- (c) 第一聯のみ對句：「蘇州柳」（卷24、後集卷7）
- (d) 對句は全くないが、六句律のなかに加えるもの：「板橋路」（卷19）

の四種に分類する。これに従えば、本詩は(a)の「六句律の正體」である（簡野道明『白詩新釋』）。明の胡震亨『唐音癸籤』卷一、體凡には、「律詩に五言小律・七言小律有り」と述べ、さらに次のごとく注する。

嚴滄浪（羽）は、唐人の六句詩の、律に合ふ者を以て三韻律詩と稱し、昭代（明代を指す）の王弇州（世貞）は始めてこれに名づけて小律と爲すと云ふ。

嚴羽の指摘は、その『滄浪詩話』詩體の條に、「律詩に止だ三韻なる者有り」と見える。こうした説によれば、本詩は三韻律詩（ただし、第一句も押韻）、七言小律などとも呼べるわけである。ただし、白居易自身のいう「小律」は絶句を指すので注意を要する。ちなみに、六句詩のみを集めたユニークな總集である陳香選輯『三韻詩三百首』は、作品を五言三韻詩と七言三韻詩に二分して収めるが、七言の三韻詩三七首は五言の三韻詩三〇〇首の約八分の一にすぎない。しかもその半数は白詩である（十七首。本詩は未收）。同書の「辯言」にいう、

六句詩の起源は頗る早く、五言の六句詩は漢に始まる。他方、七言の六句詩は唐代に始めて現われるが、五言の六句詩の盛行もやはり唐代、とりわけ中唐・晩唐である。

と(要約)。

○「風荷」 「風ニナヒク、ハチス」(『抄注』)。風は秋風。白詩には、さらに「風荷 翠の莖を翳ます」(『答元八宗簡同遊曲江後、…』詩、卷5)、「風荷 一向に蹴る」(『孤山寺遇雨』詩、卷20、後集卷5)などと用いられる。

○「老葉」 『抄注』に「秋ノ葉ナルヘシ」とあり、柿村『考證』に「秋になりて古びた葉」という。『文苑英華』には、「落^老葉」に作る。

○「蕭條」 『抄注』に「サヒシキ良」、「六注」に「カスカト云義也、又ハ、シホム義也」とある。白詩の愛用語の一つ。本句のほか三九例もあり(『索引』、そのうち、「寂寞」と對する用例も、本句のほか五例ある。「秋意 一へに蕭條、離容 兩つながら寂寞」(『寄元九』詩、卷9)は、その一例。本稿五〇番參照。白詩「秋思」(卷26、後集卷11)にも、「蕭條たる秋の氣味、未だ老いざるに已に深く語る」と歌われるように、萬物みな衰えて生氣を失なう秋のわびしさ、人生の寂寥感をたたえた言葉(疊韻)。

○「水蓼」 「水邊ニ生タル、タテ」(『抄注』)。『急就篇』卷二に對する顏師古の注に、「蓼に數種有り。葉長く鋭くして薄く、水中に生ずる者を水蓼と曰ふ。葉圓くして厚く、澤中

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

に生ずる者を澤蓼と曰ふ。…」とある。タデは水べに群生し、高さは約四五センチ、秋になると、紅や白の穗狀の長い花を垂れ、水蓼花ともいう。白詩には「水蓼の冷花 紅にして簇簇(群がるさま)たり」(『竹枝詞四首』其三、卷18)、「秋波紅蓼の水」(『曲江早秋』、卷9)などであり、羅隱の詩(『姑蘇城南湖陪曹使君遊』)にも「水蓼 花紅にして 稻穗黃なり」と歌われている。

○「殘花」 殘は衰殘・凋殘の意。上句の「老葉」と對をなし、盛りをすぎて生氣がなく、傷みしおれるさまをいう。白詩(『首夏同諸校正遊開元觀、…』、卷5)の「風は清し 新葉の影、鳥は戀ふ 殘花の枝」の例も同じ。釋慈周『葛原詩話後篇』卷一、嬾殘の條に、

蕉中師(釋大典)云ク、殘ハ殘傷ノ義ニテ、ノコルト訓スルハ、傍義ナリ。和俗「ノコル」ヲ正訓トシテ、殘傷ノ本義ヲ知ラザルモノアリ。

という。つまり、「チリノコレル花」(『抄注』や柿村『考證』、「散り残った花」(大曾根譯や西村富美子『白樂天』)ではなく、「そこなはれた花」(簡野道明『白詩新釋』)を意味する。殘字の解釋については、本稿五一番も參照。ちなみに、『文苑英華』には「開^殘花」とあるが、殘字のほうが適切であろう。

○〔寂寔〕『私注』に「衰貞」、『抄注』に「閑ナル也、衰タル意也」とある。白詩愛用語の一つ（五〇番に前出）。本例のほかに四三例もある（『索引』）。「寂寔たる萎紅（萎んだ花）低れて雨に向り」（『惜牡丹花二首』其二、卷14）は、その一例。

○『御選唐宋詩醇』卷二二は、本聯を首聯とともに「寫景は蕭瑟の致きを極む」と評する。他方、西村富美子『白樂天』は、二句を衰えゆくものの美を表し、「はかなさを好しとする王朝貴族の感受には好適」であつたと評する。

●一七六番 白居易「階下の蓮」「葉展影飜當砌月、花開香散入簾風」

○元和十一年（八一六）、作者四五歳、江州（江西省九江市）の官舎での作（花房・朱『箋校』）。江州司馬在任。當時、白居易は、東流する湓水が長江へとそそぎこむ湓浦口付近の官舎に住み、州廳内の司馬廳に出仕していた。官舎の位置は、江州城西門外の、長江にのぞむ砂岸の地にあつたらしい。⁽¹⁸⁾南宋の王象之撰『輿地紀勝』卷三〇、江州、白居易宅の條に、「白居易爲司馬時所居。有湖、居大江之勝」とあるが、湖の字は池の形訛であらう。白居易は着任の翌年（元和十一年）、官舎の敷地内に小さな池を作った。「官舎の内に新たに小池

を鑿つ」詩（卷7）によれば、底に白沙をしき、青石でかこつた一丈四方の浅い池である。詩中の「簾下」に小池を開き、盈盈として水方に積ふ」の句は、本句を理解する助けとなる。また「小池二首」（卷7）其二には、「荷（蓮の葉）側きて清露を瀉ぎ、萍（浮き草）開いて游魚を見る」と歌われている。本詩に詠まれる「階下の蓮」も官舎内の「簾下」の「小池」の蓮を指すと考えてよい。

○〔階〕『原本』玉篇『阜部第三五四に、「堂（前面が吹きぬけの廣間。四面が壁のものは室）に登る所以の道なり」と注されるように、おもに正房（主屋）から中庭へ降りる三段前後の階段をいう。中國建築史編集委員會編『中國建築の歴史』（田中淡譯編）には、中國の古い建築の傳統的な平面配置について、

敷地の周囲の三面もしくは四面のそれぞれに單體建築物を建て、その中央に中庭（院子）を形成する。周囲の建築物は主として中庭のほうを向いており、採光・換氣・排水の必要を解決している。中庭の左右兩側の建築物は、一般に對稱的な配置をとる。……敷地の四周には、圍い堀もしくは回廊などをめぐらして、閉鎖的な空間を形成する。⁽²⁰⁾と説明する（十七頁）。正房は多く南面して建てられた。要す

るに、中國の建物（住宅を含む）は、一般に中庭をかこんで、コ字もしくはロ字形に造られ（いわゆる三合院・四合院）、中庭への昇り降りに階が用いられたわけである。日本の古い佛寺の建築配置も、明らかにこうした中國の建築様式を祖形とし（21）てゐる。

○〔葉展〕 展は、巻かれていまするものを平らにのべ廣げる意。梁の劉綏の詩（「江南可採蓮」）に「卷、荷、舒、欲倚」と歌われる舒（平聲）と同意（展は仄聲）。『抄注』にいう、「蓮ノ葉ハ、始ハ卷テ、後ニノブルモノナレバ、カク云也」と。

○〔當砌月〕 當は、「正面ニアリテ少シモユガマヌコト」（『譯文全歸』）。佐久譯に「まともに砌にさす月」とある。別の白詩（「初到郡齋、寄錢湖州・李蘇州」、卷20）にも、「霽後當樓月、潮來滿座風」などと用いられる。

○〔砌〕 切りそろえた石や甃瓦をすき間なくしきつめた階段。石階・石段の意。從來、「軒下の敷石。水限りの意。階下の石だたみ、階甃」（川口注）、「階下の石だたみ」（大曾根注）、「みぎり、軒下の石」（岡村繁『白氏文集三』三八七頁）などと注されてきたが、いずれも誤りであろう。本句の砌は、平仄の面（二六對）から詩題の「階」（平聲）と同意の仄聲（去聲）の字を用いたもの。語義の點でも、砌は階と代替できる字で

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

ある。唐の釋遠年撰『兼名苑』十卷の逸文（『倭名類聚抄』二十卷本の居處部・居宅具、階の條所引）に、「砌、一名階」と見えるほか、

(a) 唐の神龍二年（七〇六）ごろに成る王仁昫撰『刊謬補缺切韻』去聲・十三霽、砌の條に、「七計反、階」と注される、

(b) 唐の慧琳撰『一切經音義』卷十二、「大寶積經第二十卷」、階砌の注に引く唐の張戢の『考聲（切韻）』に、「砌、壘也。砌、亦階也。從石、切聲也」とある、

義訓も、同じ唐代の人々の訓詁であるだけに参照に値する。要するに、砌とは、平たい甃瓦や石の端を切りそろえ、すき間なく壘ねあわせ、敷き並べた階段をいう。したがって「階下や軒下の石だたみ（敷石）」ではなく、『類聚名義抄』（觀智院本）法中・石部第五十一にいう「イシハシ」（石階）そのものを指すといえよう。

ちなみに、『說文解字』（大徐本）卷九下、新附字には、「砌、階甃也」とあり、明の梅鼎祚『字彙』十集も同じである。この義訓は、階段の表面にすき間なく敷きつめられた素材の甃（一定の形に切りそろえられた敷きがわらや平たい石）そのものを指すとする説である。「砌は階」とする字訓は、この階甃

(階石・砌石)⁽²⁴⁾の引申義とも考えられよう。ただ、皆川淇園『實字解』宮室門、砌の條には、『説文』に階甃也と注す。しかれども砌はもと甃又は石のしき目、ならべたる目、かさね目をば、⁽²⁵⁾すきまなき様にくひ合すことにすることを云ふ字なり」とする。

ところで、白居易の「瘡を病む」詩(卷37、後集卷17)の頸聯には、

鶴伴臨池立 鶴伴ひて 池に臨んで立ち
人扶下砌行 人扶けて 砌を下りて行く

とある。この砌も階段の意であらう。「軒下の石だたみや敷石」から中庭に下りて歩く、と譯したのでは、やや理解しにくい。白詩の同じ五律「晚庭逐涼」詩(卷19)の首聯「送客出門後、移牀下砌初」も、同例である。ただし、平仄に關係なく砌字を階の意味に用いる例も多い。⁽²⁶⁾こうした用例は、『漢語大字典』四や『辭源(修訂本)』三を始めとする中國の辭書類では、一般に「臺階」(現代中國では一般に「家の入口の石段」を指す)と注している。ちなみに、詩中に砌字を用いた最も古い用例の一つは、南齊の謝朓「直中書省」詩(『文選』卷三〇)の、「紅藥(紅い芍藥)當階飜、蒼苔依砌上」であらう。この砌も石階や階石を意味する用例と考えられ、上句の階と

對文同義(互文同義)をなす。羅竹風主編『漢語大詞典』七も、本例を「臺階」の意とする。

●一七七番 許渾「秋の晚 雲陽驛の西亭の蓮池」「煙開翠扇清風曉、水泛紅衣白露秋」

○詩題は、南宋の蜀刻本『許用晦文集』卷一や、景宋鈔本『丁卯集』(四部叢刊)卷上にもとづく。『文苑英華』卷二九八(宋版)には「秋晚題雲陽驛西亭蓮池」に作り、岩瀬文庫所藏延慶本には「題雲陽驛西亭蓮花」に作る(『校異和漢朗詠集』)。「私注」や「六注」に「題雲陽驛亭蓮也」とある也字は、池の誤り(柿村『考證』)。

○「秋晚」 深秋・晩秋の意。許渾の「秋晚懷茅山石涵村舍」と同例。明の廖文炳『唐詩鼓吹註解』卷一に、「此れ雲陽の驛に至り、西亭の池蓮の衰謝するを見て、感じて作る」と有るなり」という。

○「雲陽」 從來、三説ある。①京兆府雲陽縣(都長安の西北一二〇里の地)：江聰平『許渾詩校注』⁽²⁹⁾の説、②長江の三峡地帯にある夔州巫山縣(四川省東端)の驛か、そのやや下流の神女館の水驛：嚴耕望『唐代交通圖考』第四卷(一一一五頁)の説、③潤州丹陽(曲阿)縣(江蘇省鎮江市の南の丹陽縣、その古

稱が雲陽縣(邑)……魏嵩山主編『中國古典詩詞地名辭典』⁽³⁰⁾の說。

このうち、③は、許渾が後期、潤州丹陽縣に住んだ(丹徒縣「京口」の丁卯橋村舎のほうは別墅)ことと關連して興味深い。ちなみに、李白の「丁都護歌」の「雲陽上征去、兩岸饒商賈」も同例。②は詩中の「葉殘花敗尙維舟」や「神女暫來雲易散」に着目した説であるが、客觀的な論據にやや缺けるようである。ここでは、しばらく清の許培榮『丁卯集箋註』⁽³²⁾卷五も採る③の說に従う。⁽³¹⁾

○〔驛〕唐代、驛傳の制度が整備された。交通幹線にそって三十里ごとに驛館が設けられ、驛馬や驛船が用意された。驛はまた、陸驛・水驛・水陸兼備の三種に分かれる。青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』⁽³⁴⁾第一篇第三にいう、驛舎(傳舎)には上廳・下廳、或は東廳・西廳等の別があった。その他、種々の建物や施設があり、周圍には塙(やち)をめぐらし、門は堂々たる層樓のものが多かったらしく、一般に驛樓と呼ばれた。

と(五二頁)。劉廣生主編『中國古代郵驛史』⁽³⁵⁾第六章第五節も參照。陳沅遠「唐代驛制考」⁽³⁶⁾は、杜甫の「秦州雜詩二十首」其九の一節を引き、秦州の驛舎には亭や池、竹林、柳陰があったと指摘する。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(六)(植木)

○明の楊慎は、本詩を『丁卯集』中の第一爲り⁽³⁷⁾と高く評價するが、清の陸次雲は「此れ縹緲の意有るに過ぎず、絕唱に非ざるなり」(『晚唐詩善鳴集』⁽³⁸⁾)と反駁する。ちなみに、大曾根注は、本聯を「晩秋に夏の蓮池の様子を想い出して賦す」とするが、夏は初秋の誤り。これは、川口注の「晩秋、作者は心の中に初夏の朝の蓮池のイメージを描く」を踏襲したもののか。しかし、川口注の「初夏」は、その譯文によれば、初秋の誤植らしい。

○〔煙開翠扇〕煙は、水面にただよう朝モヤや霧。『集註』や『考證』などは「水烟」と注する。皆川淇園『實字解』天文部、烟の條に、「水の面より、朝暮に起る氣をは、水烟といふ。岑參が「水烟晴吐月」(「江行夜宿龍吼灘、……」)は、暮の水烟なり。許渾が「水烟朝渡人」(「早發壽安、……」)は、朝の水烟なり」と説明する。許渾の「秋霧寄遠」詩には、また「橫煙秋水、疎雨夕陽中」という。

○〔翠扇〕「蓮葉、團扇に似たる」(「私注」)ゆえの比喻。柿村『要解』に、「蓮葉を美人の翠扇に、花を其の紅衣に比しての作」と説明する。川口注に、李商隱の詩に「荷は翠扇を翻^{ひるが}して水堂虚なり」とあるが、その詩の題は「和劉評事永樂閑居見寄」である。蓮の葉を團扇に見立てる發想は、す

で白居易の「南塘頌興」詩（卷32、後集卷13）に「風荷搖いて扇を破る」とあり、「六年秋重題白蓮」詩（卷26、後集卷11）にも「紺葉 風に搖いて 鈿扇圓かなり」と歌う。元稹の「高荷」（卷8）詩の「碧雲の扇を颯閃す」も、同例。ちなみに、開閉自在の扇子「摺疊扇（摺扇）」が中國で盛行したのは明初以降のこととされ、「李唐以上には摺疊扇無く」、「明の中葉以後に至れば、則ち摺疊扇も亦た單に扇と稱す」るようになった（符合棧齋『箋注倭名類聚抄』卷六、扇の條）。

○「清風」 ここでは「七月（初秋）ノ風」（『六注』、涼風の意。荻生徂徠『譯文笙蹄』に、「風清、スズシト譯シテ通ズ。サレドモ涼ノ字ヨリハ、今少シ前方ナリ。涼風ハ夏秋ニ用ユ。清風ハ春夏秋トモニ用ユ」という。杜甫の「四松」詩に、「清風 我が爲に起こり、面に灑ぐこと 微霜の若し」と歌われるごとく、爽涼感をおびる。

○「曉」 東の空がしらむ明けがた、まだ夜の明けやらぬ暗い頃をも含めていう。小島憲之「上代文獻解釋への小さき徑」（『京大『國語・國文』第十五卷十號、一九四六年）は、日本の上代の文獻（特に『萬葉集』）中の用例を、中國の漢代や六朝のそれを參照しながら歸納している、

「あかとき」（鶏鳴・五更・曉）は夜の明ける前であり、

味爽・會明（物色の見えだした頃）・曙などよりは一步前の頃を示す。…… ただ漠然と四更から五更あたり迄を「あかとき」と考へてゐたであらう。

と。皆川淇園『實字解』時令部、曉の條には、「夜あけに物の色のわかれ来るを云ふ」とする。五代の鹿虔扈「虞美人」に、「卷荷香淡浮湮渚、…… 瓊窓疏透曉風清」とある（『花間集』卷九）。ちなみに、『文苑英華』には曉を「晚」に作るが、形訛であらう。

○「水泛紅衣」 泛字を景宋鈔本『丁卯集』に「汎」に作るが、同意（浮かべただよわす）。『全唐詩』卷五三三に「泥」に作るのは、明らかに形訛であらう。許渾は「水」字を多用したため、「許渾千首濕ふ」と評された（⁴⁰『蒼溪漁隱叢話前集』卷二四所引「桐江詩話」）。本句もその一例。紅衣は、蓮の紅い花を美人のそれに見たてた表現（『要解』）。こうした發想の源は、『楚辭』「離騷」の「菱荷（菱と蓮の葉、一説に二字で蓮の葉）を製ちて以て衣と爲し、芙蓉（蓮の花）を集めて以て裳と爲す」であらう。庾信の「彭城館に入る」詩の「蓮浦 紅衣を落とす」（『考證』に指摘）は、蓮の花を紅衣に見たてた古い用例。唐代では、羊士諤「郡中即事三首」其二に、「紅衣落ちて盡くして暗香殘へ、葉上の秋光 白露寒し」とあり、元稹の

「夜池」詩(卷8)には、「荷葉團圓として莖削削、綠萍の面上に紅衣落つ」などとある。趙嘏の有名な「長安秋望」詩にも、晩秋の風情を「紅衣落ち盡くして 渚蓮愁ふ」とあって、いずれも紅い蓮の花びらが水面に散り落ちる秋景である。『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』に、

浮紅衣ハ、秋露深キ比、赤キ蓮花ノ水ニ散レバ、紅衣ヲ浮ブニ異ナラズト云フ義也。

とあるのは、まさしく唐詩の用例と似かよう解釋である。他方、『抄注』には「ハチスノ紅ナル色ノ、ミツニウツレルヲ、紅衣ヲ水ニヒタセルカト云也」とあり、川口注も「蓮の花が水に映じている」(『考證』や大曾根注も同じ)と譯す。これは、二句を初秋の光景と見なしたためであらうが、水面に紅い蓮の花びらが浮かびただよう光景としても充分捉えられそうである。

○『白露秋』『六注』に「八月節(白露節)也」とあるが、ここは『禮記』月令篇、孟秋(七月)の條の「白露降る」を踏まえた初秋の風景の描寫であらう。唐の張說「深渡驛」詩にも、「旅泊青山夜、荒庭白露秋」とある。

●一八二番 許渾「楞伽寺より、晨に起きて舟を汎かべ、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(六)(植木)

道中 懷ひ有り」「一聲山鳥曙雲外、萬點水螢秋草中」

○詩題は、景宋鈔本『丁卯集』卷上による。南宋版『許用晦文集』卷一には、汎を泛に作るが、同意。他方、金子彦二郎校定『千載佳句』四時部・早秋には、「早秋幽居言志、尋同志」と題し、『私注』や『六注』にも「題、發幽居、將尋同志」(題は衍字か、『考證』の説)と題する。また、前田侯爵家所藏傳一條爲氏筆本に「早、發幽居、將尋同志」と題する(『校異和漢朗詠集』)。許渾は後期、潤州丹陽縣に移り住み、別墅を京口(潤州丹徒縣)に設けた(前述)。「幽居」は潤州(今の鎮江市付近)のそれ(名利の俗念から逃れて、ひっそり暮らすわび住まい)を指すとも考えられるが、本詩の舞臺が蘇州である(後述)ことからすれば、地理や距離の面で宋版系の詩題がより穩當であらう。ちなみに、同志は友人の意、『後漢書』卷五七、劉陶傳に、「與に交はる所の友は、必ずや志を同じうす」とある。唐の裴說に、「早春寄華下同志」詩がある。

○「楞伽寺」蘇州の名利。北宋の人(名は未詳)の手になる『吳地記後集』に、「(吳)縣の西南二里に在り、梁の天監二年(五〇三)に置く」とあり、清鏡和尚の創建らしい。北宋の朱長文『吳郡圖經續記』卷中、寺院の條にも、「吳縣の西南の横山(七子山)下に在り。その上に塔有りて、横山の巔

に據る。隋の時に建つる所にして、石記有りて存す。白樂天及び皮・陸に詩有りて集中に載す」という。確かに楞伽寺は、中晚唐詩——白居易「自思益寺、次楞伽寺作」(卷24、後集卷7)、張祐「題蘇州楞伽寺」、許渾「題楞伽寺」、皮日休「初夏遊楞伽精舍」、陸龜蒙「奉和襲美初夏遊楞伽精舍次韻」詩など——に散見する。許渾詩の楞伽寺が蘇州市の西南約十キロの上方山(横山の東北の支脈にあたり、名勝「石湖」の西岸に位置する山)にあることは、第一句の「碧樹蒼蒼茂苑東」によつて裏づけられる。唐代の蘇州城は、吳縣と長洲縣からなる(『通典』卷一八二)。茂苑とは、長洲縣の名稱の由來となつた古い名園「長洲苑」(春秋時代、蘇州に都した吳の庭園)の略稱であり、蘇州の別稱としても用いられる。茂苑の語は、古く左思の「吳都の賦」(『文選』卷五)に「長洲の茂苑を佩ぶ」と見える。白居易は「憶舊遊」詩(卷21、後集卷1)のなかで、蘇州を追憶して「長洲の苑縁にして柳萬樹」と歌い、「長洲苑」詩(卷18)も残している。

晨起は、朝早く起床する意。時には早起きして出發する意を含む。前漢の蘇武の作とされる「詩四首」(『文選』卷二九)其四に、「寒冬十二月、晨起踐嚴霜」とあり、溫庭筠の著名な「商山早行」詩にも「晨起動征鐸、客行悲故郷」とある。

許渾「晨起二首」其一には、「簷楹落月を含み、幃幌殘燈に耿る」と歌う。ちなみに、皆川淇園『實字解』時令部に、晨を「夜のけしきおほりになりて明日になる氣色を持たる時を云ふ。即ちあけはなれ小口のあさのことなり。古に使ひたるには夜よりかけて言へること多し」と説明する。

道中は舟旅のそれ。清の許培榮『丁卯集箋註』卷六には、本詩の尾聯を解説した後、詩題中の「有懷」の意に言及する。

時に初秋に在り。菱の葉・蓼の花、一路蕭森たるの景は、漢時の茂苑に連接す。能く故宮禾黍の思みを動かさざらんや。此の路は、誠に惆悵するに堪へん。所謂「懷ひ有り」とは、此に在りて故宮を懷ふなり。

○大曾根注に、「晩夏の曉の光景を詠んだ」とするが、『千載佳句』早秋の項に收められるごとく、晩夏は初秋の誤り。金子・江見『新釋』も同じく誤る。『和漢朗詠集和談鈔』(詩注)に「立秋ノ詩也」とするのは、やや穩當さを缺く。

○「一聲」⁴⁶ 靜寂を破る「一聲」によつて何かが起こるといふ發想は、唐詩に多い。たとえば、韋應物の「聽鶯曲」は、鶯の聲とともに夜が明けるさまを「春漏方に殘き一聲にして曉なり」と歌い、白居易「山石榴、元九に寄す」詩(卷

12) は、山石榴^{ツツジ}の開花を「九江三月 杜鵑來る、一聲催^{うなが}し得て一枝開く」と歌う。許渾の「一聲の溪鳥 暗雲散ず」(「滄浪峽」も同例)。

○〔山鳥〕 從來、「ここではほととぎす(郭公)」の意とされてきた(川口・大曾根注など)。しかし、「一聲」以下は「皆な舟中に在りて聞く所、見る所を歷指」(『丁卯集箋註』卷六)した初秋の曉景の描寫であり、明らかに杜鵑^{ほととぎす}(子規)ではない。中國の杜鵑は、陰曆三月ごろから五月にかけて鳴き、詩歌にはおおむね晩春三月の鳥として詠まれている。詳しくは、拙稿「ほととぎすのうた―杜鵑と郭公をめぐる―」⁴⁷⁾参照。したがって本詩の山鳥は文字どおり單なる山の鳥を意味し、ある種の鳥の名に特定できる論據はない。このことは、許渾の他の用例、

① 高樹下山鳥 平蕪飛草蟲 (「秋霽寄遠」)

② 水蟲鳴曲檻 山鳥下空階 (「晨起二首」其二)

③ 山鳥一聲人未起 半床春月在天涯

(「南海府罷、南康阻淺、…」)

④ 棹移山鳥沒 鐘斷嶺猿啼 (「泛舟、尋鬱林寺道玄上人、…」)

⑤ 折驚山鳥散 攜任野蜂隨 (「聞薛先輩陪大夫看早梅、…」)

などを参照すれば、一目瞭然であろう。詠まれている季節に

しても、④が不明である以外、①と②が秋、③と⑤が春であって一定しない。

編者の藤原公任自身は、じつは「山鳥」を郭公^{ほととぎす}に比定することの恣意性を充分承知しながら、和漢の詩歌の並列という基本原則を堅持するために、あえて郭公の條に置いたらしい。奥村郁子『和漢朗詠集』―「郭公」をめぐる⁴⁸⁾―には、この問題點に關して、ほぼ次のごとくいう、

朗詠に適し、日本的な季節感(夏の鳥)と矛盾しない、杜鵑の佳句(中國のそれ)は、非常に少ないものの、和歌における夏の第一主題ともいべき郭公の項を設けないわけにはいかない。そこで季節や内容上の多少の矛盾や誤りにこだわらず、和歌のイメージに合う佳句を選んだ。「山鳥」という語には「山ほととぎす」という歌語が對應し、「一聲」は「ひとこゑ」と讀んで、ほととぎすの鳴き聲を表す最も普通の、しかも特徴的な言葉と對應させることができる。句中に詠まれた夜明けのイメージは、「夏の夜の臥すかとすればほととぎす 鳴く一聲に明るるしのめ」(『和漢朗詠集』夏夜)などに見られるものと非常に近くなり、あまり不適當とは感じられない。

と。傾聴すべき説であろう。

中國詩文論叢 第十二集

ちなみに、郭公をホトトギスと讀むのは誤りである。伊藤東涯『秉燭譚』卷四、「杜鵑ノコト」の條に、「ホトトギスヲ杜鵑・子規ヲ以テ譯スルハ當レリ。郭公ト云ハ不_レ當。郭公は布穀ノ類ニテ、子規と別物ナリ」という。⁽⁴⁹⁾青木正兒「子規と郭公」によれば、「郭公」という言葉は、唐の開元二十七年(七三九)になる陳藏器撰『本草拾遺』(『本草綱目』卷四九、⁽⁵⁰⁾鳴鳩の條所引)のなかに、布穀^{カウコウ}を呼ぶ吳(江東)の方言として始めて見出されるという。

○「曙雲外」 曙は暁よりも日の出に近いころ、皆川淇園『實字解』時令部に、「東の空の氣色が山のあなたには日景のかかりたる氣色になりたるを云ふ。されば俚語にほのぼのあけと云ふ意になかなふ字」と説明する。前掲の一七七番參照。『六注』に、「曙雲ノ外トハ、曉ノ雲ノ上ニテ鳴タル」という。これは、外字を「上」の意味に捉えたものであり、一解として注目される。王鏐『詩詞曲語辭例釋(增訂本)』には、方位詞「外」は、詩詞のなかできわめて彈力的に用いられ、内^{なか}中・邊^{そば}畔・上・下などの方位を表すことができる指摘し、上を意味する用例の一つとして、岑參「早秋與諸子登號路西亭觀眺」詩の「亭高出鳥外、客到與雲齊」をあげる。ちなみに、許渾「題宣州元處士幽居」詩に、「鳥散千巖曙、

蜂來一逕春」とある。

○「萬點水螢」 點の本義は小さな黒點。ここでは小さく丸いものを數える量詞。『抄注』に、「萬點トイハ、螢ノ數ノ多キ意也。燈ヲ一點ト云フモテ、可心得也」とある。許渾の詩(「別劉秀才」)に「燈 水螢を照らして千點滅^きゆ」とあり、白居易「閑夕」詩(卷22、後集卷2)にも「數點 新螢度^{あら}る」という。この水螢(水べに群がる螢)も、「許渾千首濕^しふ」(前述)の一例。

○「秋草中」 金子・江見『新釋』に、「螢は夏の物なるに、ここに秋草中といへるは異なるが如くなれど、晩夏の螢は秋に近ければ、かくいへり」とあり、大曾根注もこの說に従う。これはおそらく、『枕草子』第一段などに代表される、夏の夜の風物としての螢のイメージにもとづくものである。しかし中國では、螢は一般に晩夏から初秋にかけての景物であり、特に中國古典詩の世界では秋の夜の風物として歌われることが多い。⁽⁵¹⁾許渾の詩(「出永通門、經李氏莊」)には「秋螢」の語も見える。こうした季節感の異同の原因について、上野理「伊勢物語の藤と螢」⁽⁵²⁾は、じつは日中兩國に生息する螢の種類が異なるためだ、として次のようにいう、

わが國にいる螢はゲンジボタルとヘイケボタルで、ゲン

ジは五月中旬から六月末にかけて出現し、七月にはほとんどみることではないが、ヘイケは六月中旬からあらわれ、土地によって出現期もことなり、九月上旬に出現することもあるという。しかし、螢の最盛期は、六月末、螢合戦の行われるという陰暦五月二六日前後のことである。

『禮記』月令は、季夏に「腐草爲螢」としるし、晩夏や初秋の風物とする。中國の螢はアキマドボタルで、陽曆の八月中旬から九月にかけて出現し、一〇月に入っても多くみることができるという。

と。山崎みどり「螢のイメージ」⁽⁵⁵⁾も、螢に関する専門書を参照して上野説を補強し、『禮記』に夏の終りごろ（陰暦六月）から螢が姿を見せ始めるとするのは、「中國の螢がアキマドボタル（日本では對馬にのみ生息）であることに因っている」と明言する。傾聴すべき説である。

ちなみに、螢と草の取り合わせは、『集註』に「月令に腐草化爲螢とあれば、螢にたよりある也」と指摘されるごとく、一種の縁語關係にある。梁の簡文帝「詠螢詩」には、「本と秋草と并じ（同じ一つの身の上）」と歌う。ただし、許渾詩の場合「腐草よりわきいで、雨の中を鬼火のごとく飛ぶ古代のイメージ」（入谷仙介「陸游と螢」⁽⁵⁶⁾）は、すでに失われている。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂六（植木）

る。⁽⁵⁷⁾

〔注〕

（1）『舊唐書』卷四四、職官志に、「京兆・河南・太原所管諸縣、謂之畿縣」とある。ちなみに、唐代の縣は七等級（赤〔京〕・畿・望・緊・上・中・下）に分かれた。

（2）賀次君點校『元和郡縣圖志』（中華書局、一九八三年）卷二の校勘記に引く清の張駒賢の「攷證」参照。

（3）愛宕元「唐代關內道の城郭規模と構造」（『中國邊境社會の歴史的研究』〔研究成果報告書〕一九八九年所収）参照。

（4）同朋舍刊、一九八六年。

（5）『寧夏大學學報（社會科學版）』一九八三年二期。

（6）花房・前川『元稹研究』に收める「年譜」に、「天壇山在河南濟源縣」とある。

（7）秋は夏の誤り。整屋尉就任は、四月二十八日。朱『年譜』など参照。

（8）『白氏文集の批判的研究』四三四頁。

（9）『中華文史論叢』一九八八年一期。

（10）（8）の書の第二部三の分體表には、七言六句二九首、五言六句八首をあげる。

（11）『送羽林陶將軍』詩を指すか。清の王琦は「六句近體、唐人時有之、本於六朝人、或號爲小律」と注する（卷十七）。ただし、久保天隨『李太白詩集』中卷（六七八頁）には、

中國詩文論叢 第十二集

「五六二句を脱したものと」する。

(12) 明治書院刊、一九三三年。

(13) 花房英樹「讀白氏文集記」(西京大學學術報告『人文學報』四號、一九六四年)一七〇頁參照。

(14) 臺灣商務印書館・人文庫、一九八四年。

(15) 「三韻詩、亦稱六句詩。由於介在四句(絕詩)與八句(律詩)之間、聲調緩促比較適中、所以、自來不少詩人都喜愛這種體裁、佳作也多」ともいう。

(16) ある一方に吹きなびく。「一向」は一方に片よる意。

(17) 王拾遺『白居易傳』(陝西人民出版社、一九八三年)一四一頁の説に従う。朱『箋校』卷七(三六七頁)に引く『嘉慶』九江府志』卷三には、「白樂天故宅在(德化縣)城中」とある。

(18) 白詩「北亭」(卷七)や「司馬宅」(卷十)など參照。

(19) 平凡社刊、一九八一年。

(20) 竹島卓一『中國の建築』(中央公論美術出版、一九八〇年三版)十三頁參照。

(21) 福山敏夫「寢殿造の祖形と中國住宅」(同『住宅建築の研究』中央公論社、一九八四年所收)參照。

(22) 『舊唐書』卷四七、經籍志下(內部子錄、名家類)による。

『新唐書』卷五九、藝文志三には二十卷とする。

(23) 藤堂明保編『學研漢和字典』參照。

(24) 小川環樹『陸游』(筑摩書房、一九七四年)一七七～八頁參照。

照。

(25) 唐の慧苑『大方廣佛華嚴經音義』經卷第一に、砌を「夾級道兩邊平面(一作城)砌石」という。級道は階段の意。なお、前掲の『實字解』も參照。

(26) 溫廣義『唐宋詞常用詞辭典』(內蒙古人民出版社、一九八八年)の砌・玉砌の條や、盧潤章『唐宋詩詞常用語詞典』(湖南人民出版社、一九九一年)の庭砌・砌花の條など參照。

(27) 拓曉堂「許渾『丁卯集』鈔錄補正」(『文獻』一九九一年三期)によれば、『郡齋讀書志』に著録する北宋の賀鑄(字方回)校跋本『丁卯集』である。

(28) 汲古書院刊『和刻本漢詩集成(總集篇)』第二輯所收。

(29) 臺灣中華書局、一九七三年。

(30) 江西教育出版社、一九八九年。

(31) 董乃斌「唐詩人許渾生平考索」(『文史』二六輯、一九八六年)や、王遠彦「關於許渾的家世與籍貫」(『江漢論壇』一九八九年五期)など參照。

(32) 「公子、里中、時、在雲陽驛西亭蓮池、遊覽盤桓。至是、睽離日久、而時時懷想」。ちなみに、同書は「唐雲陽許渾用晦著」とする。

(33) 許渾「寄當塗李遠」詩にも「雲陽」の語が見えるが、これは當塗縣の舊名らしい。『唐才子傳校箋』卷七、李遠の條(梁超然執筆)參照。

(34) 吉川弘文館、一九六九年再版。

- (35) 人民郵電出版社、一九八六年。
- (36) 燕京大學歷史學會『史學年報』一卷第五期、一九三三年。
- (37) 杜紫綸・杜詒穀『中晚唐詩叩彈集』卷六の題下注。王仲鏞『升庵詩話箋證』（上海古籍出版社、一九八七年）卷十。
- (38) 孫琴安『唐七律詩精評』（上海社會科學出版社、一九八九年）所引。
- (39) 藤堂明保『漢字語源辭典』（學燈社、一九六五年）にいう、「開閉自在の扇子は、明代に日本から輸出したもので、在來の扇はうちわ形であった」（五三九頁）と。
- (40) 羅時進「許渾千首濕與他的佛教思想」（『學術月刊』一九八三年五期）によれば、『全唐詩』所收の五三一首のうち、「水」字を用いたものが二〇〇首、「雨」や「露」などの字を用いたものが二五一首あり、兩者で全詩の八五パーセントを占め、まさに一つの「濕漉漉の世界」（びしょぬれの世界）と評することができる。これは、許渾の歸依した禪宗（南宗）における水のイメージ（清淨無瑕で、湛然として恒に靜かなる最高の境界、普く衆生を濟度する聖なる物）が、その境涯（早年の水郷生活や羈旅の生涯）とともに大きな影響を及ぼしたのだ、と。
- (41) 曹林梯校注『吳地記』（江蘇古籍出版社、一九八六年）の注釋による。
- (42) (41) によれば、隋の大業四年（六〇八）、太守の李顯の創建である。
- (43) 拙著『唐詩の風土』一五六頁參照。
- (44) 白詩「初到郡齊、寄錢湖州・李蘇州」や、「登闕門閑望」詩など。
- (45) 許渾「憶長洲」詩にも、「香徑小船通、菱歌遶故宮」と見える。
- (46) 小島憲之『古今集以前』（塙書房、一九七六年）二二四頁以下參照。
- (47) 早稻田大學『比較文學年誌』第十五號、一九七九年。なお、同論文で見落した杜鵬の古い用例を二つ補っておきたい。『樂府詩集』卷四四に收める「子夜四時歌」（晉宋齊辭）の「春歌二十首」其六に「杜鵬竹裏鳴、梅花落滿道」とあり、同其十一に「新燕弄初調、杜鵬競晨鳴」とある。
- (48) 川口久雄編『古典の變容と新生』（明治書院、一九八四年）所收。
- (49) 小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷四五、杜鵬の條も參照。
- (50) 『青木正兒全集』（春秋社、一九七一年）第八卷所收。
- (51) 岡西爲人『本草概説』（創元社、一九七七年）七六頁以下參照。
- (52) より古くは、宋の唐愼微『重修政和經史證類備用本草』卷十九に見える。
- (53) 入谷仙介「陸游と螢」にもいう、「螢は月令でも季夏であり、車胤の逸話でも、また、俳句の季題でも、現代の我々の感覺でも、すべて夏のものであるが、（南齊の）謝朓以後、

中國詩文論叢 第十二集

中國の詩では、秋に用いられることが多くなる」と。

(54) 早稻田大學『東洋文學研究』第十七號、一九六九年。

(55) 『中國詩文論叢』第三集、一九八四年。

(56) 『野草』第二七號、一九八一年。

(57) ちなみに、本條の川口譯は、同『文庫』本のなかで、すでに訂正されている。